

農耕社会のはじまりと遠賀川式土器—四国島を中心に—

香川県埋蔵文化財センター 信里 芳紀

弥生文化を表現した語として「弥生文化は縄文文化と深い関係にあり、大陸文化を媒介としてなされた後者の質的な転換の姿」がある。(近藤 1962、141 頁)。縄文文化の内在的な発展により弥生文化の成立を想定した立場の表現である。一方で、外来的な影響をどの程度見積もるかによって、農耕社会としての弥生文化の評価の立場は変わってくる。

農耕社会への転換を示す水田、木製農具などの外来的な考古資料は、小林行雄氏により「文化運搬者としての土器様式」(小林 1938、248 頁)の遠賀川式土器とともに西日本各地に伝播するとされた。遠賀川式土器は、小林氏が「櫛歯状器具によらざる沈直線文、櫛目式文様ならぬ平行直線文」(小林 1932 a、112 頁)などの文様的特徴による定義を行い、その後、形態的特徴を付加され「西日本の前期弥生土器の総称」(小林 1958、134 頁)とした土器様式である。また、その伝播に関して「外から新しい文化をもった人々が来なくてはならないと思うのだが、その移住者の量を、どの程度にとどめるのが適当か」(小林 1947、45 頁)、「追々に縄文式民族を吸収して、弥生式集団を膨張させつつ移動した」(同、46 頁)として人の移動・移住を想定した。以来、西日本の縄文時代晩期の突帯文土器と弥生時代前期の遠賀川式土器の遺跡内における共伴・量比などの出土状況は、「棲み分け」、「共生」、「弥生化」などとして表現され、農耕社会への移行期の実情が説明される。(佐原 1970、春成 1973、中井 1975 ほか)。

遠賀川式土器を指標とするこの議論は、農耕関連の考古資料が増加した現在も続いているが、土器そのものから製作者(主体)を直接的に読み取ることは難しく、製作者(遺跡)と使用者(遺跡)が同一とは限らないことに留意する必要がある。ただし、他の考古資料と比較することで、その変化や実情を読み取ることは可能である。

そこで、本稿では、遠賀川式土器に焦点をあてつつ、合わせて遺跡立地、水田、農具などの考古資料の変化と関連の検討を行い、四国島における農耕社会移行期の実情を考える。

また、遠賀川式土器については「いつ伝播したのか」という時間的な問題ではなく「どのように伝播したのか」を重視して検討を進めたい。

検討対象は、四国島の縄文時代晩期後葉から弥生時代前期中葉とする。縄文晩期後葉から末葉を突帯文期、弥生時代前期初頭の遠賀川式土器と突帯文土器が共存する段階と土器様式を初期遠賀川期、初期遠賀川式土器と呼び、その他は、適宜、弥生時代前期前葉や中葉などの時期呼称を用いる。

1. 縄文晩期(突帯文期)の農耕関係資料
2. 初期遠賀川式土器の伝播
3. 継続した遠賀川式土器の斉一性と他の考古資料
4. まとめと今後の課題

【引用・参考文献】

- 秋山浩三 1999 「近畿における弥生化の具体相」『論争吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録一 考古学研究会 189-222 頁
- 泉 拓良 1991 「弥生時代はいつ始まったか」『争点日本の歴史』第1巻原始編 新人物往来社 188-202 頁
- 梅木謙一 2000 「遠賀川系土器の壺にみる伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会 959-981 頁
- 遠藤英子 2012 「西日本の縄文晩期から弥生前期を対象としたレプリカ法の実践—第二次調査：中国・四国地域」『高梨 学術奨励基金年報平成二四年度研究成果報告』
- 大久保徹也 2004 「〈弥生都市〉の特質と形成条件」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会 50 周年記念論文集 考古学研究会 169-178 頁
- 小野由香・小島恵子・畠中宏一・前田光雄 2006 「Ⅷ 弥生時代の石器・石製品」『田村遺跡群Ⅱ第九分冊』高知県教育委員会 財団高知県文化財団埋蔵文化財センター 207-298 頁
- 加島次郎 2002 「西瀬戸内地方の弥生時代前期石器」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会 315-335 頁
- 小林行雄 1932a 「安満B類土器考—北九州第二系彌生式土器への關聯を論ず—」『考古学』第三卷第四号 東京考古学会 3-12 頁
- 小林行雄 1932b 「吉田土器及び遠賀川土器のその伝播」『考古学』第三卷第五号 東京考古学会 21-27 頁
- 小林行雄 1938 「彌生式文化」『日本文化史体系』第一巻 214-253 頁
- 小林行雄 1947 『日本古代文化の諸問題 考古学者の対話』高桐書院
- 小林行雄 1958 「おんががわしき—どき」『図解考古学辞典』134 頁
- 近藤義郎 1962 「弥生文化論」『岩波講座日本歴史1』原始および古代〔I〕岩波書店 141-188 頁
- 佐原 真 1967 「山城における弥生式文化の成立—畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」『史林』第50 巻第五号 773-757 頁
- 佐原 真 1970 「大和川と淀川」『古代の日本』第五巻近畿 角川書店 24-43 頁
- 佐原 真 1979 「IV瀬戸内をめぐる九州と畿内の弥生土器編年の検討」『高地性集落の研究』資料編 17-26 頁
- 菅波正人 2004 「福岡平野の突帯文土器単純期—板付Ⅱ式の資料」『板付Ⅰ式期の再検討』埋蔵文化財研究会福岡大会発表要旨集
- 田崎博之 1994 「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会 35-74 頁
- 田崎博之 2000a 「水田稲作農耕社会への移行—日本列島の土器・水田・農具の検討—」『韓國古代文化의 變遷과 交渉』尹世英教授停年記念論叢刊行委員会 517-586 頁
- 田崎博之 2000 b 「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会 737-789 頁
- 田崎博之 2014 「韓国青銅器時代における木製農工具の特性—日本列島西南部地域の縄文時代晩期—弥生時代前期との比較を通じて—」『東アジア古文化論攷』中国書店 300-317 頁
- 中井一夫 1975 「前期弥生文化の伝播について」『樞原考古学研究所論集創立 35 周年記念』樞原考古学研究所 75-98 頁
- 中沢道彦 2014 「日本列島における初期農耕の導入」『中四国地域における縄文時代晩期紅葉の歴史像』第 25 回中四国縄文研究会徳島大会発表要旨集 113-128 頁
- 仲原知之 2002 「弥生前期の石庖丁生産と流通」『紀伊考古学研究』第 5 号 紀伊考古学研究会 1-14 頁
- 中原 計 2003 「木製品における弥生時代前期の画期—広鋏I式の製作工程の変化を中心に—」『待兼山論叢』史学篇 37 27-50 頁
- 中村 豊 2015 「縄文晩期から弥生時代の農耕について—東部瀬戸内地域—を中心に」『みずほ別冊 2 弥生研究の交差点—池田保信さん還暦記念—』大和弥生文化の会 191-200 頁
- 信里芳紀 2000 「讃岐地域の初期遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会 431-451 頁
- 信里芳紀 2014 「中部瀬戸内南岸における縄文晩期農耕の様態」『中四国地域における縄文時代晩期紅葉の歴史像』第 25 回中四国縄文研究会徳島大会発表要旨集 53-69 頁
- 濱田竜彦 2015 「香川県林・坊城遺跡における縄文晩期後葉の種実圧痕と食物栽培」『みずほ別冊 二 弥生研究の交差点—池田保信さん還暦記念—』大和弥生文化の会 227-236 頁
- 濱田延充 2000 「遠賀川式土器の様式構造—土器のサイズからみた遠賀川式土器—」『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会 1005-1024 頁
- 樋上 昇 2009 「木製農具と耕作の技術」『弥生時代社会の考古学 6 弥生社会のハードウェア』同成社 64-74 頁
- 平井 勝 1995a 「岡山平野における遠賀川系土器の出現—津島遺跡南池地点出土土器の再検討—」『古代吉備』第 17 集 古代吉備研究会 20-33 頁
- 平井 勝 1995b 「遠賀川系土器の成立」『展望考古学』考古学研究会 40 周年記念文集 考古学研究会 67-74 頁

- 深澤芳樹 1985 「土器のかたち—畿内第Ⅰ様式古・中段階について」『財団法人東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』財団法人東大阪市文化財協会 41-62 頁
- 深澤芳樹・庄田慎矢 2009 「②先松菊里式土器と夜臼式・板付式土器」『弥生時代の考古学Ⅱ 弥生文化誕生』同成社 172-187 頁
- 藤尾慎一郎 2014 『弥生文化像の新構築』吉川弘文館
- 藤田憲司 1982 「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号 54-132 頁
- 三好孝一 1996 「第二節河内潟における遠賀川系土器の始原—若江北遺跡第五次調査の成果から—」『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第五次—』財団法人大阪府文化財調査研究センター 126-140 頁
- 三好孝一 2001 「河内湾東・南縁部における弥生文化の受容と定着」『みずほ』第35号 大和弥生文化の会 20-32 頁
- 森岡秀人 1984 「縄文ムラと弥生ムラの出会—畿内北部を中心として—」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 38-48 頁
- 家根祥多 1993 「遠賀川式土器の成立をめぐる」『論苑考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会 267-329 頁
- 山中一郎 1992 「石の動き、土器の動き」『新版古代の日本 第五卷近畿Ⅰ』角川書店 73-92 頁
- 若林邦彦 2018 「初期農耕集落の定着と複雑化—研究状況の整理と展望と雲宮遺跡」『初期農耕活動と近畿弥生社会』雄山閣 237-248 頁